

大 會 抄 錄

宋代における官僚家系について

森 田 憲 司

宋代は科擧官僚の時代であるとされる。そして、科擧が受験者の個人的資質に大きくかわかる故、それを通じて得られる地位は一代限りのものであり、官僚達は層として流動的であつたと指摘される。しかし一方では、六代、七代にも互つて官僚を出し續けた家系は、我々が宋代の史料を見ていく時、決して珍しいものではない。先に私は、こうした家系を、「官僚の家」と呼んだ。この「官僚

の家」に於ては、「別塗出仕」とくに、様々な形で與えられる恩蔭による出仕が、その維持に大きな役割を果していた。しかも、確かに政権の中樞は、多くの場合、科擧官僚によつて占められてはいたが、膨大な官僚組織での人的需要は、それだけではまかないきれず、その點を補つたのが、この「別塗出仕者」達であつた。今回の發表では、こうした家系のいくつかを具體的に取り上げて検討し、その官僚としての地位の維持（いわば、「恩蔭による官僚身分の再生産」と、彼等の官僚組織内での位置とについて考えてみたい。

第一の材料としては、再び「成都氏族譜」を取り上げる。この書物が、一定地域の官僚層について、まとまった材料を與えてくれるからである。同じく「官僚の家」といっても、幾代かに互つて宰相

を出したような中央の名門もあれば、「氏族譜」が對象としているような地方官僚群もある。當然の事ながら、その官界での地位は異なり、今回の對象である後者の場合、その多くは、幕職州縣官を振り出しに、蜀地の中下級地方官を轉々として、その官僚としての生涯を終えた人々である。彼等のような地方の中下層官僚の家系については、從來充分な検討の對象となっていないので、その點を中心にして考えてみたい。

宋代の一都市圖について

— 宋平江圖解讀作業 —

伊 原 弘

宋平江圖は、南宋紹定二（一二二九）年の蘇州の都市圖として名高い。地方志等にも都市圖が掲載されているが、寫實性・精密さにおいて平江圖に一步も二歩もゆずる。

本地圖は第一級の都市圖として、都市の發展・構造の究明に寄與するのみならず、交通・經濟、官衙・寺院の構造、さらには都市住民の研究にまで大きな意味を持つ。しかるに現在のところ、本地圖の利用法はおろか解讀法すら確立されておらず、充分な研究がなされていないのが實情である。

都市研究をこころみる時、この様に重要な意味を持つ都市圖を多角的に分析し、史料としての可能性を追求することが必要である。そしてそれは、單に平江圖の解説にとどまらず、都市史研究に大き

な史料を寄與する事にもなろう。

本論は以上の點をふまえて、地圖の新解釋を示し、都市圖解讀法の開拓をめざすものであるが、手順としてまず蘇州の變遷を地圖から讀みとるを試みる。

明末清初、江南郷紳の權力構造

川 勝 守

今日、明清史研究においては、郷紳論あるいは郷紳問題を取り上げるものが極めて盛んであり、一種の流行の感を呈している。しかし、郷紳問題が關係するところと言えば、國家政治から地域社會の運営に至るまでの、各段階における徵稅・治安維持・勸農救恤・裁判教化、さらには市場支配や世論指導等々と言った、極めて廣範圍にわたるものであり、それ故に、この時代の研究者はどのようなテーマを扱っても、必ずや郷紳の問題と結びつくことになる。それだけに、郷紳とかその政治的社會的存在の表現たる郷紳支配なるものの概念規定や、機能・役割評價の特徴ということになると、研究者により様々な事例が抽出され、それにより人ごとになり異なる理解がなされるようである。また、具體的問題を提起すれば、明後期に登場した郷紳存在は、清朝國家の中で全面的に開花するというのが、このことはいかなる歴史事象に即して説明されるのであろうか。本報告は、一般に「郷紳の横」「官府の把持」といわれる事態を、明末、常熟の錢謙益に對する「民」の訴えと、清初康熙中葉に

おける崑山徐乾學に對する訴訟事件との二事例について、具體的に究明することに努力しながら、江南郷紳の權力構造の一つの型を明らかにしてみたい。

資料 「張漢儒疏稿」他（『虞陽說苑甲編』）

「徐乾學等被控狀」（『文獻叢編』四・五）

『史記』の構成と「易」の思想

上 田 早 苗

『史記』は古代の人々が共通して持っていた認識方式（創造）と死（破滅）とが永遠に繰り返えされる——にもとづいて歴史を記述しており、それは循環史觀とならざるを得ない。太古の黃帝（土德）より始まった歴史は、木德の夏、金德の殷、火德の周、水德の秦と王朝が交代するが、王朝滅亡の原因を洪水や暴虐とみなしているのも、民間説話に普遍的に見られるパターンである。始皇の暴虐によつて最大のカタストロフ（破局）を迎え、ここに黃帝以來の文化は盡く滅亡する。しかしこのカオス（混沌）の状況からやがて高祖劉邦が出現し、蛇を斬ってコスモス（秩序）へと轉換し、中國は再生されるのである。『史記』の作者は上古の黃帝より始めて一巡して再び土德に戻った今上武帝の太初元年に至る一周期の通史を著そうとしたのであり、従つて黃帝と武帝との事蹟には類似するところがきわめておおい。王朝の交替を五行にあてて説明するのは、五行相勝説とされているが、しかし司馬遷は「易は天地陰陽四時五